

紫式部における「公」と「私」と

——日記・家集より見た「憂し」をめぐる——

河 北 靖

紫式部日記という作品に対して、読者の感じる最初の点は、この作品をどのように位置づけるべきなのかという、言わば文学作品としての根幹に触れる問題であろうと思われる。即ち、一条天皇第二

皇子敦成親王の誕生およびその前後の儀式・行事の記録——仮名文の御産部類記——という、公的記録的な側面と、ある一人の女房としての作者個人の内面的・私的世界の表出という側面との、所謂二面性を、どのように理解するかという点に集約的に表れるものである。この問題は又、この日記の執筆動機・目的や、成立事情などとも深くかかわってくるものである。一般には、日記寛弘六年正月三日の敦成親王戴餅の儀の記事のあと、「このついでに、人のかたちを語りきこえさせば」以下の人物批評の部分や「消息文的部分」と称し、その他の「記録的部分」とを区別して考え、両者を形式・内容上ともに異質のものとする見方が有力である。更には、このことも含めて、現存日記が作者自筆の原形であるか否かという論も未だ結論を見ていないというのが現状のようである。

初めに提示した、記事の二面性という問題は、このように困難な

問題を背後に負っているのであるが、現在我々に残されている限りの紫式部日記の内部の問題として、以下この二面性という点について検討してみることも一つの方法かと思われる。

一体、二面性とか「複眼的」とか呼ばれ、公的部分と私的部分とは対立し分裂するものとして裁断されるのが妥当であるのかどうかについてはまず私見を述べてみたい。数々の記事の二つについて分類を試みることは省略するが、結論的に言えば、右のように二類に分けることは全体としては不可能である。一々の記事の単位をどのように定めるかによってもその結果は多少相異があるが、純公的か純私的かという観点から分類しようとした場合、いずれにも属し難い記事に遭遇するのである。それは、公的部分の描写が、純客観的などころから行われていたものが、次第に筆が進むに従って、作者紫式部の個性あるいは主観に支えられて、結果的には私的世界の表出に至ってしまうといった図式で示されよう。こうした描写乃至表現は、公と私、言い換えれば客観と主観とが融合されたものと見るべきであって、その一方に属さしめたり、一連の記事を途中で分断して各々に分属させたりすることは許さない性質のものである。こ

うした記事の顕著なことは既に先学の指摘もあるが、それは又次の例によっても明らかであろう。

みな濃き相に、表着は心々なり。汗衫は、五重なる中に、尾張はただ葡萄染を着せたり。なかなかゆゑゆゑしく心あるさまして、ものの色あひ、つやなど、いとすぐれたり。下仕への中にいと顔すぐれたる、扇とるとて六位の藏人どもよるに、心と投げやりたるこやさしきものから、あまり女にはあらぬかと思ゆれ。われらを、かがやうにて出でるよとあらば、またさてもさまよひありくばかりぞかし、かうまで立ち出でむとは思ひかけきは。されど、目にみすみすあさましきものは、人の心なりければ、いまよりのちのおもなさは、ただなれになれすぎ、ひたおもてにならむやすしかしと、身のありさまの夢のやうに思ひつづけられて、あるまじきことにさへ思ひかかりて、ゆゆしくおぼゆれば、目とまることも例のなかりけり。

△二一五—二一六⁽³⁾ V

これは寛弘五年十一月二十二日の童女御覧の日の記事であるが、装束を「ゆゑゆゑしく心あるさま」「すぐれたり」の評価を与えつつ描写した後、下仕への童女が六位の藏人に自分から進んで扇を投げ与えた事実を記す。細部にまで観察が及んでいることが知られるが、更に、それに対して「あまり女にはあらぬかと思ゆれ」と批判的な感想が付されている。そして、この感想を結節点として記事は「われらを」云々と展開され視点は自己に回帰してゆき、その到達点は、わが「身のありさま」への思念の世界となつて、もはや眼前の晴儀の光景に対しては目もとまらない状態になつて、⁽⁴⁾ 事実この日の記事はこの先には無い。記録放棄である。記録の姿勢、客観描写

の姿勢から、記録していた対象（ここでは下仕への行為）の中に自己を見出して、思念の世界、主観表出の世界へと一直線に突き進むことになり、言い換えれば公を機縁として私が語られるというパターンである。それだけに又、下仕への「あまり女には」云々の批判も、単なる傍観者の言葉とは遙かに重く響く結果ともなっている。

右のような描写・表現方法は、所謂消息文的部分を除いた記録的部分の中では後半になるほど多く見られるという傾向にあるが、全体としての数はそう多くないにしても、紫式部日記の一つの特徴として看過し得ないものであることは、初めにも述べた通りである。更に又、こうしたパターンで語られる作者の「私」の世界の多くの場合が、右の例と同様に「身」の問題として提出されていること、その「身」は「憂き」ものとして認識されていること、そしてめでたい中宮の様をたたえる冒頭の文章中にも「憂き世」として用いられていること等の事実が容易に見出される。⁽⁶⁾

そこで次には、この「憂し」という認識の形成の相を、家集を手がかりにして考えてみたい。

二

式部の宮仕への最初の作は「初めて内わたりを見るにも、物のあはれなれば」と題する、

57身のうさは心のうちにしたひきていま九重ぞ思ひ乱るる

であることはよく知られており、その年時は寛弘二年或いは三年の十二月二十九日であった事が諸氏により推定されている。そのように、この歌は、初出仕に際して詠まれたものであり、必ずしも年代順の排列でないといわれる家集において宮仕え期の歌三十三首のうち

の冒頭に置かれており、かつ「身の憂さ」「思ひ乱る」といった語句が用いられているというような、種々の問題を内包したものである。換言すれば、式部の生涯における一大転機と思われる宮仕えとは彼女にとって何であったのかを解く鍵がこの歌に集約されている。その考察は以下の作業によって具体的に進めてゆきたいと思う。

次に掲げるものは先の57の「身の憂さ」と同じ又は同系の語句の見られる式部の作である（詞書は省略する）。

62 つれづれとながめふる日は青柳のいとど憂き世に乱れてぞふる

69 影見ても憂きわが涙落ちそひてかごとがましき滝の音かな

106 あらためてけふしもの悲しきは身の憂さやまたさま交りぬる

124 ふればかく憂さのみまさる世をしらで荒れたる庭に積もる初雪

125 いづくとも身をやる方の知られねば憂しと見つともながらふる

かな

このように、宮仕え期の歌三十三首中の六首に「憂し」系の語句が見られる訳である。そのうち62は、「いつか参り給ふ」との弁のおもとのからの見舞に対する返しで、式部の退出中のものと解せられ、106も詞書に「む月の三日、内より出でて、古里のただしはしのほどに」云々とあるから同じく退出中の独詠、124・125は「人」への返歌二首で、「荒れたる庭」が式部の実家を指すとすればやはり退出中もしくは宮仕えをやめて後の作と見做される。

それに対して残る69はやや状況を異にする。これは66から72までの連作のうちの一首で、寛弘五年五月五日土御門第での法華三十講

五巻の日から翌六日早朝にかけて、式部と、小少将・大納言の二人の女房との間に詠み交わされた。この連作のうちのはじめの二首は、66 妙なりや今日は五月の五日とて五つの巻の合へる御法も

67 かがり火の影もさわがぬ池水に幾千代すまむ法の光ぞ

と、この邸内に満ちあふれる仏法の功德をたたえた、賀歌の体である。ところが、これを承ける68の詞書には、「公事にいひまぎらはずを」云々とあって、まさしく前の66・67の二首は表面上の賀歌であって、本心からの寿ぎではないことを表明しているのである。詞書はこれに続けて、

向かひ給へる人は、さしも思ふこともし給ふまじきありさま、よはひのほどを、いたう心深げに思ひ乱れて

と、「向かひ給へる人」（これは古本系日記歌によれば大納言の君）の作、

68 すめる池の底まで照らすかがり火のまばゆきまでも憂きわが身かな

が置かれ、続いて翌朝になって式部と小少将との間に交わされた二組の贈答69 70 71 72となる。ここにも、「憂きわが涙」（69）「うき添はららむ」（70）、「うきになかるる」（71）と三首まで「憂し」系の語（「浮き」を掛けたものもある）が見え、更に72では「根」に掛けた「音」（泣く音）が用いられているのである。

このように、掛詞を用いた技巧もあるけれども、式部ら三人の間には共通して「憂し」とする感情があって、それが「公事」の規制を打ち破って、いや「公事」が華麗であり荘厳であるが故に逆にそれとの対比が鮮明に示されるわが身の「憂さ」が思い知らされるのを抑制できずに、めでたい日とは対極的な方向へ突き進んでゆくので

である。それは、68の詞書の冒頭「公事にいひまぎらはす」に端的に示されているように、67の賀歌が表面的な賀歌であったのだが、更に溯って当日の昼の歌66にしても同様であつて、「今日は五月の五日とて五つ巻の」というあまりにも即物的な詠みぶりには、どこかそぞらしさを感じられ、これまた「言ひまぎらは」した歌であらう。この二首は、詞書の上からは断定できないけれども、道長か誰かに命ぜられて詠んだ献歌ではなからうか。

以上見てきたようにこの一連の作には、めでたい公の世界の裏に「憂し」とする式部ら三人の私の世界が黒々と横たわつてることが明白に見て取れるのである。勿論、贈答という形は実際以上に感情の共通性を強調し誇張するものであるけれども、「もろともにおりてながめたり」に見られる69 || 70の式部と少将との交流は決して単なる挨拶ではない理解と共感の上に成り立っていると思われる。又、表面上の明(66・67)から69以下の少将との贈答の暗へ一変する所に置かれた68は大納言の独詠のようであるが、これは「公事」として「言ひまぎらは」した式部の心の奥にあるものを大納言が詠んだものと見ることも可能であらう。でなければ贈答でもないのにここに置かれてよいはずがない。共感するからこそ66・67の「言ひまぎらは」した賀歌の後に置かれるのである。

さてその68の詞書を更に検討してみよう。「公事に」云々に続いて、「向かひ給へる人」は次のように式部の目に描えられている。

さしも思ふこともし給ふまじきかたちありさま、よはひのほどを、いたう心深げに思ひ乱れて

ここには、「憂し」の共感を覚えるに際しての、新鮮な驚きが語られていようである。言わば、意外な共感者を発見した驚きであ

る。その容貌・容姿・年令から見て「思ふこと」があらうとは思われない女性(日記歌によれば大納言の君)が、なんと「いたう心深げに思ひ乱れ」て「憂きわが身」を嘆じていることの発見である。その、「憂きわが身」こそ、自分が「公事に言ひまぎらは」したところの、心の奥にあるものなのだ……。この人も又、自分と同じ気持を抱えているのか……。

右の箇所はさしずめこんな風に言い換えられようか。その中で、「さしも思ふこともし給ふまじきかたちありさま、よはひのほど」に注目したい。「思ふこと」即ち苦惱は、容貌・容姿・年令が原因となるとの見方がうかがわれるのだが、彼女にはそれらのどの条件も合致しないのである。それでも「思ひ乱れ」ているのであるから、やはり苦惱があり、「憂きわが身かな」と言う。とすると、容姿や容貌や年令などの、外面的条件だけが苦惱を生むのではない。式部はここではわが身と比較してこう言っているのだと解釈したい。そうでなければこの歌が浮いてしまうのである。大納言の君が具体的にどんな苦惱を抱いて「憂きわが身かな」と嘆じているのか、又それがどのような内面的条件に因るものかを明らかにすることは出来ないが、少なくとも暗れの間とは異質の、暗い苦惱を持っている点で、式部との間に精神的連帯が形成されようとしていることだけは確かであらう。

さて、式部自身に問題を限ってみると、彼女の「思ふこと」とは一体何であつたのだろうか。宮仕え初期の頃の作と思われる次の三首から見てみたい。

58 閉ぢたりし岩間の氷うち解けば緒絶えの水も影見えじやは
60 み吉野は春のけしきにかすめどもむすばはれたる雪の下草

62 つれづれとながめふる日は青柳のいとど憂き世に乱れてぞふる
58 は「いと初々しきさま」で「古里」に退出後、「ほのかにかたたら」
た人に贈ったもので、「岩間の水」は宮中を、「緒絶えの水」は自
己をそれぞれ喩えたとされる。60 は「春の歌奉れ」との求めに対し
「まだ出でたちもせぬ隠れ家」から差し出した献歌で、「雪の下草
」を自己に喩えて、春めく宮中と対比して詠んでいる。この二首は
いずれも、宮中と溶け込めない鬱屈した自己が表出されている。62
は既に見たように、退出中に贈られた弁のおもとの返歌である。
詠まれた状況も相手も異にする三首であるが、いずれも実家にて
鬱屈した気持を詠むという点で共通している。この背景には、

「かばかり思ひ屈しぬべき身を、いといたうも上聚めくかな
」といひける人を聞きて

63 わりなしや人こそ人といはざらめみづから身をや思ひ捨つべき
に見られるように、同僚女房からの陰口を聞いて、自己を保持する
ことに必死で踏みとどまろうとする抵抗の姿勢があろう。その抵抗
は脆くも敗れ去ってゆくのだが、その間において、式部の「思ふこ
と」は宮仕えと密接な関係にあることが推察されるのである。

とここで、この反面に、同じく宮仕え期の作でありながらも、右に
見たものとは全く様相を異にするものがあることも亦事実である。

87 めづらしき光さし添ふさかづきはもちながらこそ千代をめぐら
め

89 いかにかが数へやるべき八千年のあまり久しき君が御世をば
詞書によれば（日記にも同様の記述がある）、前者は敦成親王五日
の産養、後者は五十日の夜、ともに宴席で詠まれたものである。そ
して、前者では「酔ひ乱れののしり給ふさかづきの折」にさし出さ

れたものであるし、後者は道長から「歌詠め」との要求があつて応
じたものであるという事情になっている。日記によれば後者の場合、
式部はこの宴席からのがれようと宰相の君を誘つて御帳の後に隠れ
ていたところを道長に見つかり、「和歌一つづつ仕うまつれ。さら
ば許さむ」と言われ、

いとはしくおそろしければ聞こゆ。

という、言わばその場逃れの気持から詠んだとの経緯が知られる。
そんな事とは知らない道長は、「五十日」に「如何」を掛け、その
縁で「八千年」を詠み込んだこの歌に上機嫌になるのだが、それは
式部の心境とは遠い。又前者は、同じく日記に徴してみると、この
歌は準備されていたもの実際に披講されることはなかった。

いずれにせよこの兩首は、強制又は半強制による「公事」の歌で
あることが肝要である。表面上は主家のそして若宮の賀を寿いでい
るけれども、前述の三十講の五巻の日の賀歌（66・67）と同様、宮
仕え人としてこのように詠まざるを得ないが、私の立場はそこに暗
く封じ込められているのであつて、決して内心からの讃嘆などでは
ないという事である。

この他に、同じく主筋にあたるのであつても、又別の種類の歌も
ある。

77 女郎花さかりの色を見るからに露の分きける身こそ知らるれ
78 白露は分きても置かじ女郎花心からにや色の染むらむ

贈歌は式部、返歌は道長で、日記にも皇子誕生前の人々々の描写の一
コマとしてこの贈答をめぐる二人の様子が見える。朝露をふくんだ
女郎花を几帳のかみから道長がさし入れたのに対して式部は、女郎
花に比して盛を過ぎた我が身を卑下して見せる。道長は、「心の持

ちようで女は美しいのだ」と慰めてみせる。見事な両者の応酬で、風流は盛りあがっている。この時の道長を日記には「いとほづかしげ」と記している。又次の例、

九月九日、菊の綿を上の御方よりたまへるに

15 菊の露わかゆばかりに袖ふれて花のあるじに千代はゆづらむは、菊の着せ綿によって老いをぬぐい去るという風習をめぐって、式部と道長北の方倫子との間に濃やかなやりとりが交わされたことを物語る。日記にも、「いとよう老のごひ捨てたまへ」という倫子の伝言を付して見えるところである。この歌においては「あるじ」なる語が用いられているが、これは「菊の花を下さった方、持ち主」くらいの意で、それ以上には出ない。

斯様に、主家筋に関わる場合であっても、風流の遊びという場合には、その一場面が印象的であるが故に日記や家集に書き留められることはあっても、公と私というような観点から把握されることはない。次元が異なるのである。「菊の露」の歌に「あるじ」とあっても、それが直ちに「私」を呼び醒ますような位置には立っていないことは、先に触れた通りである。

宮仕え期の歌の特徴を一通り見てきたが、ここで整理すれば次のようにまとめられよう。

- (1) 「憂き世」「身の憂き」等、「憂し」とする認識が顕著で、重要な位置を占めており、これこそが式部の基本的認識であろう。
- (2) それは宮仕え当初から既に形成され、実家に退出して強く自覚されていた。
- (3) その苦悩は、公に対する私というものが対比的に扱えられる時に鮮烈になり、華麗さ・めでたさを侵食して暗の世界へ自己増

殖的に下降してゆく。

- (4) その下降の仕方は、時に表現の奥に隠された形で複雑に示されることがある。

(5) 苦悩の次元にまで至らない、言わば気楽な風流として余裕をもつて対処される場合も、右の一連の傾向の反面に存する。

ほぼこの五項目で宮仕え期の式部の現実認識を説明した訳だが、この傾向は、家集の宮仕え期の歌と、日記とに共通して見られる。同時に又、両者を総合的に比較検討することによって得られるものであって、両者を補完的に考察することこそが、より十分な説明を生むのである。

三

次に、宮仕え以前の様相は如何なるものであったかを、家集の該当歌から探ってみる。

式部の宮仕えの動機の一つとして、夫宣孝との死別が大きな位置を占めるとされている。とすれば、前節に見て来た諸点の実態を更に詳細に明らかにする為には、他のどの時期よりもまず寡婦となつて以後の時期の作に注目するのが当然であろう。本稿もやはりその点から再検討してみたい。

家集において夫宣孝の死を示すのは40の詞書「去年の夏より、うすにびなる人に」云々が最初であり、その時期は、これに続けて「女院かくれさせ給へる又の春」とあることから、長保三年夏と推定できる。家集はこれ以後、ある男との恋の贈答や物語絵を題材とする題詠などを含み込みつつ、57の初出仕の折の詠に至るまでの間に

この寡婦時代の作を収める。それらの歌を通観すると、(4)夫の死を慟哭する体の直情的な挽歌風の歌はほとんど見えず、(5)むしろ遺児や物語絵・名所絵や、朝顔・竹・山吹等に託して悲しみを歌い、(6)独詠のみでなく贈答の形式も用いている、等の諸点が顕著である。

つまり、感情の表出が間接的で抑制されたものとなっているのである。これは又、自己を、40「去年の夏より、うすにびなる人」、54「世を常なしなど思ふ人」と三人称化して示し、同時に夫の死を、48「世のはかなきことを歎くころ」、53「世の中のさわがしきころ」とやや漠然とした形で示すなどの表現方法とも密接に関わってくる。この、間接的表現を以て、直ちに歌風云々と言うのは飛躍に過ぎようが、敢えて言えば、悲しみの極にありながらもその自己を客体化した地点から詠まれているという傾向が指摘できるかもしれない。

以上、やや概括的なこの期のアウトラインを設定したが、これを基にしつつ、二、三の歌についてとりあげてみる。

48 見し人の煙となりシ夕より名ぞむつまじき塩がまの浦
53 消えぬ間の身をもしるゝ朝顔の露と争ふ世を歎くかな

54 若竹の生ひ行く末を祈るかなこの世を憂しといとふものから
名所絵・朝顔・竹に託された歌であるが、まず注目されるのは、これらの歌の詞書に、「世のはかなきことを」(48)・「世の中のさわがしきころ」(53)・「世を常なしなど思ふ」(54)と、「世」の語が見られ、歌にも53・54に「世」が用いられている点である。そしてその「世」を「憂しといとふ」(54)という。ここには、夫の死という現実的不幸を見、幼児をかかえた未亡人として投げ出された「世」を、「嘆」き「厭」しつつ、「憂し」という心情に至る

さまが見て取れ、そうした「世」即ち境遇にある自己は、「消えぬ間の身」と位置づけられていることが知られるのである。ここで「身」も「世」も、夫との死別という、あくまで現実的な不幸に由来し、現実的レベルで嘆きかつ厭われている。言わば具体的・原初的なものとして把握された「世」であり「身」である。従ってその時発せられた「憂し」も具体的・原初的な感情と見做せよう。

では、その直後に置かれた二首はどうか。
身を思はずなりと歎くことの、やう／＼なために、ひたぶるのさまなるを思ひける

55 数ならぬ心に身をばまかせねど身にしがふは心なりけり

65 心だにいかなる身にかかなふらむ思ひ知れども思ひ知られず
ここにも「身」が見られるが、同時にその「身」が「心」という存在との関係で扱えられた、新しい発想が見られる。この連作において両者の相克が詠まれていたことは既に指摘されている通りであるが、それを踏まえて私の指摘したいのは、「数ならぬ心」である。一体に「数ならぬ身」という表現は頻出するが、「数ならぬ心」とする例は和歌においては三例を見るのみであり、非常に珍しい。しかもその三例はいずれも恋の贈答の場に用いられており、この式部の場合のように述懐に用いたのは皆無である。その意味する所は甚だ大きいと言わねばならない。この事実から右の二首について考えてみたい。

夫の死とそれによる境遇への嘆きが「身を思はずなり」の言葉と解されよう。これは前の48詞書「世のはかなきことを歎く」、53歌「世を嘆くかな」と同意であり、要約的に述べたものである。その嘆きは、しばらくの時の経過によって「やう／＼なめ」になった

り、逆に「ひたぶる」に湧き起つたりする。そうした嘆きの様は、必然的に、「身」に宿る「心」のあり方への眼へと発展してゆく。情から意である。又は、境遇と主体と言ひ換えられよう。ここにおいて、稀有な例「数ならぬ心」は、自己の主体のつたなさを意味する。これ以前には「身」「世」は単独で用いられていたが、ここに至ってそれに「心」が関与することによって、現実的レベルの不幸から、宿命的な主体のつたなさへと、抽象化・思想化されてゆくのである。

ここに至って、第二節の冒頭に掲げた初出仕の歌57の検討に入る。この歌にも「身」と「心」とがとりあげられている。それはともに抽象化されたものである。従ってここに言う「身のうさ」も、もはや夫の死による不幸だけに局限されるのではなくて、それ以後に形成されてきた、宿命的主体としての自己のつたなさの認識なのである。宿命的なわが身のつたなさの思いがつき従って来て、いま宮仕えに出ることになったその場所で、思いはひとしお激しい、というのがこの歌の真意であって、決して「あこがれてきた宮仕えへの感慨」といった性質のものではない。不本意な出仕が避けられない所まで遂に追いつめられたというわが身の宿命的つたなさへの思いが「いま九重ぞ」に強く誓っている。

以後の宮仕え期については前節で検討したが、要するにそこで繰り返し吐露された「憂さ」とは、この初出仕の折の、宿命的な自己の主体のつたなさへの認識が拡大されてゆくことの叫びと言えよう。従ってその場合、宮仕えの中での体験や交際は、その叫びをますます現実化し骨肉化してゆく働きをしているのである。そうした要素に出会う度に式部は「憂し」を発してゆき、これがそが彼女

の現実認識の核となつてゆくのである。

日記の表現に即して言えば、こうした認識が式部の底にあるが故に、公的行事の記事も、その公に対する私の世界を通過せざるを得ず、客観描写は式部の主観に支えられたものになつてゆくのだと言えよう。紫式部日記の独自性はここにこそ認められよう。

〔注〕

(1) 中野幸一氏『日本古典文学全集』解説の二「紫式部日記の内容と成立事情」。

(2) 秋山虔氏「紫式部の思考と文体(一)および(二)」「源氏物語の世界」所収に詳しい。

(3) 以下、日記の本文は『日本古典文学全集』による。

(4) 十一月二十日からの三日間の五節の記事には、集中的にこの傾向が窺われる。前掲(注2)参照。

(5) 十月十三日の水鳥の記事もその一例である。又、同十六日の行幸の記事中の駕輿丁の描写もある。

(6) 「いとさらなることなれど、うき世のなぐさめには、かかる御前をこそたづねまるべかりけれと、うつし心、をばひきたがへ」とあり、この「憂き世」は、「うつし心」と併せて考えると、決して軽いものではない。付記参照。

(7) 紫式部集の本文は、以下南波浩氏『紫式部集の研究』所収の「定家本系校定本文」による。洋数字は歌番号。

(8) 清水好子氏『紫式部』六四頁参照。各々の詠作時期については、中島あや子氏「紫式部集所載歌の詠作年代について」(『語文研究』83号)に精細な考証がある。

(9) 女房仲間の一人とされる。(今井源衛氏『紫式部』及び南波

氏岩波文庫本『紫式部集』脚注)。

(10)「かがり火の」に続く日記歌の「すめる池の」の詞書は、

おほやけごとにいひまぎらはすを、大納言の君

とある。(南波氏岩波文庫本による)又、この女性については大

納言源扶義女廉子(道長室倫子の姪)が^{あて}られる(萩谷朴氏『紫

式部日記全注釈上』一四七頁以下に詳しい)。日記の寛弘六年正

月三日戴餅の儀に奉仕した女房の中に見え、容姿は「いとささや

か」、髪は「たけに三寸ばかりあまり」「こまかにうつくし」、

顔も「らうらうし」とされ、美貌さが知られる。年令はさだかで

ないが、この記述からすれば若そうである。

(11)南波氏岩波文庫脚注。清水氏にも同様の見解がある(『紫式

部』にこの「人」を女房の一人とされる説に従いたい)。

(12)式部と道長との間に交情の存在を推定される萩谷氏は、嫉妬

をこめた皮肉な倫子の伝言に対する竹篋返しがこの歌の意であら

うとされる(前掲書)。交情の有無はともかく、この歌にそこま

でうがった見方するのは如何であろうか。

(13)清水氏前掲書一二二頁以下に代表される。

(14)新古今恋二題しらず西行一一〇〇

数ならぬ心の咎になしはて、知せでこそは身をも恨みめ

信明集二一〇三九(中務との贈答の連作中)

数ならぬ心の内にいとゞしく空さへ許す頃の侘しき

曾丹集二二四六五(恋の沓冠の歌31首の内)

数ならぬ心を干々に砕きつゝ人を忍ばぬ時しなれば

以上正統国歌大観による。尚西行の歌は山家集七六四五によるものである。この三首いずれも恋の相手に自分を卑下して訴えた

り、想定される相手念頭において自己を嘆くものである。

(15)清水氏はこれを「何ものかに自分の行く手を妨げられたとい

う思い」とされ、願望の坐折を予想しておられる(前掲書)。示

唆に富む見解と思うが、具体的な資料が無い以上、境遇への嘆き

と解する。

(16)今井氏はこれを、

長年、憧れ続けてきた宮廷に初めて召しだされた今、かえって千

々に思い乱れて、不幸を背負ったわが身の姿に感慨が動く(前

掲書一五四頁)とされるが、傍点部(引用者による)の關係に意

味上問題があるように思われる。

〔付記〕本稿は「憂し」を中心として考察したが、関連する「うつ

し心」・「うつつ」等についての論及は他日に譲りたい。

尚本稿は昭和四九年度提出の修士論文『紫式部日記の研究』の中

の一部を補訂したものである。御指導いただいた稻賀敬二先生に

は感謝申し上げる。

— 広島大学大学院在学 —